



Title	文学者が「映画」を語る時：日本近代文学における「映画」受容の諸相
Author(s)	寺内, 伸介
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46592
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 寺 内 伸 介

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 19949 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 18 年 3 月 24 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

文学研究科文化表現論専攻

学 位 論 文 名 文学者が「映画」を語る時—日本近代文学における「映画」受容の諸相—

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 内 藤 高

(副査)

教 授 出 原 隆 俊 教 授 柏 木 隆 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本に映画が移入された 19 世紀末以来、日本近代の文学者たちが映画に対してどのような反応を示し、どのように関わってきたかを何人かの作家に焦点をあてて検討した論文である。序章、「「映画と文学」前史——夏目漱石を中心に」、第 1 章「小説と「映画」」、第 2 章「谷崎潤一郎の映画論——映画・女・国民」、第 3 章「山口誓子とモンタージュ」、第 4 章「徳田秋声と「映画」」、第 5 章「「ニセモノ」であること——三島由紀夫の映画論について」、終章「「映画と文学」を論じること」のそれぞれの章、及び「はじめに」と「結語」からなる 400 字詰め原稿用紙換算で約 300 枚の論文である。

「はじめに」では、比較文学のジャンル間交渉の研究として、映画と文学の問題が最近本格的に論じられ始めているが、まだモダニズム文学などに研究対象の枠が限定されており、映画が日本に入った 19 世紀末から第二次世界大戦後に至るまで範囲を拡大して論じる必要があること、また、これまでの研究では文学者にとって「映画的」なるものとは何かについての考察が不十分であったとして本論文の研究の意義が主張されている。

序章では、夏目漱石を中心に論じられ、映画移入期にまだほとんど映画に積極的な価値を見いださなかった漱石であるが、動きをより敏感に捉えようとする当時の時代的な視覚の変化は漱石のなかにも反映されており、それは例えば、『三四郎』の中の活動写真を見ない三四郎、動きや変化をなかなか見ようとしない三四郎と、活動写真を見る与次郎、動きや変化に敏感な与次郎とのコントラストによく現れていることが述べられている。

第 1 章では、1920 年前後、映画が次第に小説と接近する時期が取り上げられる。小説を読む際にも、それを「映画的」に読むようになる感性の成立が指摘され、逆に、いかにも映画を思わせる手法が数多く盛り込まれた芥川龍之介の短編小説「影」は、その結末から、小説に過剰に「映画的」なものを見ようとする読者に対する皮肉ともなっていることを指摘している。

第 2 章では、西洋や中国などについての異国趣味の時期と同じ時期に映画にも強い関心を持った谷崎潤一郎であるが、谷崎の映画に対する見方の中心を為すのは、現実を正確に映すものとしての映画であり、しかもそれは現実の本質を映すというイデオロギカルな見方である。こうして谷崎は、女性の本質さらに日本の国民性の本質を示すものとして、日本映画改良の主張へと向かうことが指摘されている。

第 3 章では、モンタージュという映画の表現手法と俳句の関係が、山口誓子のケースを取り上げて論じられている。

俳句とモンタージュの類似性は、昭和初期当時よく論じられたことであるが、単作の俳句表現の限界を感じていた誓子はモンタージュをヒントに連作の方法を試み始める。こうした試みの跡が辿られている。

第4章では、トーキー出現の頃から映画に強い関心を持つようになった徳田秋声を取り上げられ、晩年の『仮装人物』などの作品には秋声の文体への映画からの影響も推察できるように、秋声を、単に自然主義の作家と見なすのではなく、モダニズム的な側面も持つ作家としてより豊かに捉え直すことを主張している。

第5章では、戦後の作家の例として、三島由紀夫と映画の関わりりの深さが指摘されている。三島の映画に対する関心の強さはシネポエム的な詩の創作など、既に三島の10代から充分窺うことができるが、この章では演劇の生身の肉体とは異なる、映画の「抽象的肉体」への関心、その持つ意味について特に重点を置いて考察がなされている。

終章では安部公房などの作家が取り上げられ、映画にとって何がリアルなのか、そうしたなかで映画と文学について論じることはどういうことなのか、締め括りの考察が行われている。

論文審査の結果の要旨

本論文の価値は、まず、まだ多くの場合個々の作家の枠内で論じられることの多い文学と映画の関係についての考察を、できるだけ多くの作家を手がかりに論じて行こうとする拡大化にある。より多くのケースを検討することによって、モダニズムのレベルだけでなく、様々な、そして時には意外な文学と映画の関係が明らかになってくる。誓子、三島のケースなど、本論文はその幾つかの例を提示することに成功している。そしてそれは、単に社会現象的に映画と文学者の関係を追っていくだけではなく、日本近代文学というものがどういうものであったかを考えるために映画を重要な手掛かりとする、文学及び映画の根本問題を充分に考えようとした論文となっていることは積極的に評価できる。

提示されている個々の見方に関しても、例えば『三四郎』に関して、三四郎と与次郎を、動きを見ようとししない人間と見る人間とに対比的に捉え論を進めて行く点など着眼点としてはなかなか面白い。(もちろん異論も充分可能であるが。)アプローチの方法や書き方に関しても、基本的には堅実な姿勢が保たれており、ミスなども比較的少ない論文といえる。

こうした特質はあるが、もちろん本論文にも不十分な点、改善すべき点はある。それぞれの章の間に分析の着眼点や方法などかなりのバラツキがあり、まだ個々の章が、論文全体を包括する結論を得るためにはうまく働いてはいないところがある。終章には、先行する章の論を踏まえた上で、さらに掘り下げた論の展開が欲しい。また自己の論の主張以外に、もう少し一般的な状況の説明があった方が、論の説得力も増すように思われる。個別的な点としては、芥川の「影」の結末の部分の解釈、また「三島はニセモノを演じることを反復していくことによって本物となった」、
「谷崎は映画を現実を追求するものであり、そこから本質が得られると考えた」などの断定は、さきほどの『三四郎』の解釈の問題ともども、さらに注意深く論じられる必要がある。また、申請者は「映画的」という言葉が文学テキストを批評する際に安易に使われることに懸念を表しているが、徳田秋声のテキストの分析については、申請者自身もこの言葉をやや安易に用いているように思われる。

こうした問題点はあるが、それは今後さらに研究を重ねていくことによって十分に克服できるものであり、これまであまり研究がなされていなかったテーマに進取적に取り組んだ姿勢と、粘り強い準備作業によって得られた一定の成果は高く評価できる。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。